

コロナ禍で考える 子どもの“いのちと健康”

子ども白書編集委員●野井真吾

今年は、新型コロナウイルスの話題に触れないわけにはいきません。この間、日本では、首相の独断で2月27日に全国の小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等の臨時休校が要請されました。それにより、子どもたちは突然学校に行けなくなってしまい、大好きな友だちや先生と会えなくなってしまいました。年度末とも重なったことから、気持ちの整理もできないまま、新年度を迎えなければならない状況にもなってしまいました。

さらに、「緊急事態宣言」が発出されて不要不急の外出禁止が要請され、子どもたちの居場所や行動はますます制限されてしまいました。以来、この原稿を書いているいまも多くの地域ではその状況が3か月間も続いています。いつまで続くのかさえ分からないこのような状況が子どもの“からだと心”に及ぼす影響が小さくないことは容易に想像できます。正に、緊急事態です。そのため、国連子どもの権利委員会も4月8日にパンデミックが子どもに及ぼす重大な身体的、感情的、心理的影響を警告し、「子どもの権利」を保護するよう各国に要請しています。

このような状況を踏まえて、「子どものからだと心・連絡会議」では突然の臨時休校が子どものからだに及ぼす影響についての緊急調査を実施しています。まずは、子どもの声を聴く必要があると考えたからです。残念ながら、この調査は現在実施中であるため、ここでその結果を報告することはできませんが、プレ調査の結果では休校により「友だちに会えないこと」、「(思うように)外に出られないこと」、「感染症が不安なこと」に

困っている子どもの様子を窺うことができます。そればかりか「宿題や課題が多いこと」にも困っています。

いま、私たちの社会はこの事態をどのように受け止め、子どもたちの「いのちと健康」のために何を行うべきなのか問われていると思うのです。

「からだ」の授業から「体育」を考える

その点、今年の『子ども白書』では、閉ざされた子どもの“からだと心”を解放する取り組みとして「からだ」の授業を紹介することができました。(▶p.108)

神奈川県・小田原にある旭丘高等学校には、不登校を経験した子どもが入学するクラスがあります。そして、このクラスの特徴的なカリキュラムの一つに「からだ」の授業があります。「からだ」と聞くと、体育をイメージする方も多いと思います。でも、この授業では一般的な体育の授業と違って、強く、速く、高く、美しくといったことは一切追求しません。そこでは、自分のからだを知ることや生活に必要なからだの知識、技術を学ぶことを目的に、森林ウォーキングやものづくり、沢登り等が行われます。かつて、この授業を実践する中坊氏から「からだ」の授業に対する子どもたちの感想文を紹介してもらったことがあります。すると、「からだの授業という名前をはじめて聞いたとき、体育と変わりはないだろうと思っていました。しかし、実際には自然の中でからだを動かしながら、友だちとコミュニケーションを取ることができるという、あの頃の自分たちにはすごく必要

な授業だったと思います。(中略) 入学時の私たちは、歩くだけでもしんどく感じていましたが、いまでは話ながら楽しく歩くことができます。これが当たり前になるようになりました」といった文章が綴られていたのです。

考えてみれば、ヒトは動物です。動物は「動」く「物」と書くように、元来動かなければヒトにも人間にもなれません。また、ヒトは自然の中で進化し、成長してきました。だとすると、「からだ」の授業で子どもたちが自らの“からだと心”を解放していくのもうなずけます。決して、教室の中で進化してきたわけでも、成長してきたわけでもないのです。このような事実は、Society 5.0 (超スマート社会) が到来しても同じです。むしろ、そのような社会になるほど、そのことを強く自覚しておく必要があると思います。裏を返すと、長引く休校ではそのことを一層心配しておく必要があるのです。

一方で、文部科学省の調査(2018年度速報値)によると、児童数は過去最少でありながら30日以上長期欠席者は過去最多を記録しました。小学校では、2クラスに1人はいる計算になります。また、中学生も6年連続で過去最多を記録し続けています。どのクラスにも1～2人はいることになります。このような現状を勘案しても、この「からだ」の授業は注目し値すると思うのです。加えて、そもそも「体育」の第一義的な目標は「体を育てる」ことにあります。だとすると、スポーツ教育に傾注しすぎる現状を再考してみる必要もあると思うのです。

「子どもの眼」から現代社会を考える

新型コロナウイルスの感染拡大防止に伴う休校が長引く中、インターネット依存やゲーム依存が心配されています。このことはオンライン学習の導入とも相まって、視力の低下や生活リズムの乱れも心配させます。

この点でも、今年の本書では小児眼科医で

ある富田氏による「外遊びで子どもの視力を守る」の原稿も所収することができました。(▶p.162) そこでは、世界的に近視人口が増加していること、30センチ以内の近業を続けていると近視の進行が早くなること、屋外活動が近視の抑制につながる可能性があること等が解説されています。

考えてみれば、高度経済成長期以降の日本では、多くの国民の生活が便利で快適なものに変貌しました。AI時代の到来が見え隠れする近年では、さらにその変化が加速しています。多くの駅では、階段を昇り降りする人よりもエレベーターやエスカレーターを待つ人の方が目立ちます。公衆電話を探さずとも、手元にはつねにスマホがあります。必要な情報を入手したいときも、多くの辞書や本を開かずとも、PCやスマホがあれば十分ですし、昨今のテレワークでは遠くにいる仲間とのオンライン会議も日常です。そればかりか、自動運転さえ夢の話ではありません。これが現代社会です。つまり、獲物を探してサバンナを歩き続けた人類の多くは、屋内の椅子に座って一日中スクリーンに向かう生活を余儀なくされているのです。

無論、そのような生活はおとなだけのものではありません。放課後、街を走り回る子どもの姿や子どもが集う秘密基地は過去の産物になってしまいました。公園に掲げられている禁止事項の立て看板をよくよく見てみると、ボール遊びはダメ、木登りはダメ、時には大声もダメです。これでは、室内に閉じこもってゲームやスマホに手を伸ばさざるを得ない事情も見えてきます。正に、私たちの社会が国連子どもの権利委員会から「子ども時代の享受」といった課題を突きつけられる所以です。子どもにしてみれば、屋外での外遊びを阻止する環境を完璧に整えられた中で、それでも“からだと心”の育ちを要求されているのです。これでは、「子どもの眼」が深刻な状況を呈しているのもうなずけます。

いずれにしても、子どもの眼は私たち人類と現代社会の在り方の矛盾を映し出してくれてもいると思うのです。

子どもの権利とスポーツ

子どもの運動指導に携わっている方から「最近、スポーツ整形の現場から『子どものスポーツ障害が減っているように思う』との話を聞いた」という情報を寄せていただきました。不要不急の外出自粛中ですから、当然といえば当然なのかもしれません。ただ、スポーツ障害の多くは、練習量だけに起因しているわけではありません。スポーツ障害の予防に必要といわれている適切な休養、ケガをしないためのトレーニング、クーリングダウン（整理運動）といった常識が子どものスポーツ現場の日常でいかにないがしろにされていたかがわかるようにも思いました。

ただ、このような悪しき日常を正そうとする動きも見受けられます。2020年は日本の野球界が大きく変わる年になるはずだったといえます。小学生から高校生までの投手の投球制限を導入することになっていたからです。このようなことから、野球界における子どもの投球制限に関する国内外の動向を中村氏に解説してもらいました(⇒p.159)。

一方で、子どものスポーツを取り巻く悪しき日常の問題は、日本だけのことではないのかもしれません。2018年11月20日、ユニセフは「子どもの権利とスポーツの原則」を発表しました。当然、そこには子どものいのちと健康を守る観点が盛り込まれています。それだけでなく、子どものスポーツを企業の影響から守る観点も記されています。本書では、安倍氏にその解説をお願いしました。(⇒p.160)子どもの権利を根底に据えた子どものスポーツの在り方を国際的な視点で再考する契機にしてくださればと思います。

身体的な「3密」を回避し精神的な密を！

長引く休校が子どもの「いのちと健康」に及ぼす影響は小さくありません。そのことを心配する声は種々の報道でも確認できます。

ただ、そのような心配に比して学習の遅れを心配する報道があまりに多いのも気になります。もちろん、休校中の宿題や課題がまったく必要ないとは思いません。しかし、対面とは異なる学習に戸惑う子どもも、諸々の事情で宿題や課題に向き合えない子どももいます。そればかりか、休校明けはこれまでの学習の遅れを取り戻すために1日7時間の授業が検討されていたり、夏休みの大幅な短縮が検討されていたり、といったことも耳にします。これでは、未曾有の事態に戸惑う子どもたちに追い打ちをかけることにならないかが心配です。学校再開後は、不安な中で休校中を過ごした子どもたちが再会することになります。ただ、冒頭紹介した「友だちに会えないこと」、「(思うように)外に出られないこと」に困っているという子どもの声は、子どもたちにとっての学校の存在意義を教えてくれていると思います。また、「感染症が不安なこと」に困っているという声は、みえないウイルスに不安を抱えている子どもたちの心境を物語っています。まずは、このような子どもの声に寄り添うこと、そして、感染症に関する正しい学びの提供といったことから、子どもたちとの新しい一歩を踏み出してみたいかがでしょうか。

いうまでもなく、昨今のコロナ禍は子どもをはじめ多くの人々の「いのちと健康」を脅かしています。そして、新しい社会の在り方を模索する契機にもなっています。ただ、子どもは群れて育つものです。換言すれば、「3密(密閉、密集、密接)」が子どもを育ててきたといえます。そのような中、身体的な3密を回避しつつ、精神的な密をどのようにつくり出していくかが問われていると思うのです。